

戦国の山城・徹底攻略

FREE
無料

とよた人

Toyota
Jin

Powered by
歴史人
Vol.01

『歴史人』執筆陣が語る
豊田の“豊かさ”

山城巡りをプランニング!
豊田市内
山城・歴史MAP

徳川家康の源流
松平郷と
松平氏遺跡

特集 家康のルーツは
豊田にあった!

天下人の物語

戦国屈指の山城群

小和田哲男氏特別寄稿
豊田市の山城

旅情を誘う景観
足助街道歴史旅



知って攻略!

豊田山城14選 大給城/松平城/松平城山城/寺部城/足助城/市場城/飯盛山城/
小渡城/武節城/大桑城/大沼城/川口城/夏焼城/衣・挙母3カ城



足助の町並み (→P.16) は国の重要伝統的建造物群保存地区。足助城の高櫓から足助の旧市街を眺めることもできる。



復元された七州城隅櫓 (七州城→P.13)。現在周辺は城跡公園として整備され、豊田市美術館・豊田市博物館も隣接。



矢作川支流・巴川沿いの香嵐渓 (→P.19)。毎年11月には香嵐渓もみじまつりが開催される。飯盛山城や足助城 (→P.11) も近い。



市場城 (→P.11) 近く、小原地区の小原四季桜。春・秋の二度開花し、秋には紅葉と桜を同時に見ることができる。



松平郷の松平東照宮 (→P.14)。徳川家康と松平氏の始祖・松平親氏を祀る。季節の草花漆絵108枚からなる天井画も美しい。

事業企画／豊田市 制作・監修／歴史人編集部 朝日放送テレビ株式会社
編集／深谷美和 地図／アトリエ・プラン・戸澤徹
デザイン／近藤琢斗(FROG KING STUDIO) 営業／筒井達也・三森文子
校正／東京出版サービスセンター 編集人／後藤隆之
発行日／2026年3月25日 発行人／園部 充
発行所／株式会社ABCアーク ©朝日放送テレビ・ABC ARC

本誌掲載記事・写真・イラストなどの無断複写(コピー)・複製・転載を禁止します。
写真協力／豊田市・一般社団法人ツーリズムとよた
表紙画像／足助城・木造徳川家康像(隣松寺蔵)・松平親氏公像(松平郷園地)

特集

家康のルーツは豊田にあった！

天下人の物語× 戦国屈指の山城群

群雄割拠した戦国時代の豊田
松平氏ら戦国武将が拠点とした山城の物語

豊田市の山城

家康の源流・松平氏や
三河の戦国武将たちの出世・激戦の地！

豊田山城14選

- ① 大給城
- ② 松平城
- ③ 松平城山城
- ④ 寺部城
- ⑤ 足助城
- ⑥ 市場城
- ⑦ 飯盛山城
- ⑧ 小渡城
- ⑨ 武節城
- ⑩ 大桑城
- ⑪ 大沼城
- ⑫ 川口城
- ⑬ 夏焼城
- ⑭ 衣・拳母3力城
(金谷城・桜城・七州城)

徳川家康も十八松平も
豊田のココから始まった！

松平郷と松平氏遺跡

足助城主が見守った街道！
山海の物資が行き交った要衝を歩く

足助街道歴史旅

とよた人特別企画
『歴史人』執筆陣が語る
豊田の豊かさ

本誌掲載の山城とスポットはココ
豊田市内山城・歴史MAP

愛知県豊田市について

地理 Geography

豊田市は愛知県三河地方に位置する、人口41万4529人のまち(令和7年12月現在)。面積は918.32平方キロメートルと愛知県内最大で、広大な土地の7割が森林。市街地の豊田地区のほか、松平氏発祥の地・松平地区や、古くから街道沿いのまちとして栄えた足助地区など、歴史・文化が豊かな地域で構成されている。

[豊田市地区分布図]



歴史 History

市内には約25か所の旧石器時代の遺跡があり、当時から人が活動したと考えられている。日本神話でおなじみの、倭建の双子の兄・大碓命にまつわる猿投神社もある。戦国時代には松平氏、鈴木氏などの豪族が勢力を競い合い、

関連する山城も多く点在。今川氏、織田氏、松平氏の接点だった豊田地域では激しい戦いが続いた。江戸時代になると市域の一部を衣藩(後の拳母藩)が治め、拳母城を拠点に城下町が築かれた。



大碓命を祀る猿投神社 (→P.18)。大碓命は一帯の開拓に尽くしたという。

産業 Industry

矢作川、巴川の水運により古くから産業が発展し、明治時代には蚕糸、綿糸(ガラ紡)が発展した。拳母町は養蚕のまちとして栄えたが、昭和13年(1938)にトヨタ自動車工業株式会社(現・トヨタ自動車株式会社)の拳母工場が論地ヶ原(現・トヨタ町)の丘陵地に完成すると、自動車産業の中心地に。現在は「クルマのまち・モノづくりのまち」として知られる。



市内を南北に流れる矢作川 (→P.19)。自然豊かな川沿いでは温泉郷も発展した。

群雄割拠した戦国時代の豊田

松平氏ら戦国武将が拠点とした山城の物語

特別寄稿

豊田市の山城

豊田市には、国史跡の松平城や大給城をはじめ、165もの城・城跡が存在する。山城とは何か？そして豊田市内の山城の魅力と楽しみ方について、戦国史研究の第一人者である小和田哲男氏が解説する。



平成初期から発掘調査が始まり、平成3年以降、本丸の高櫓・長屋、南物見台の矢倉、橋などを順に復元。平成5年に現在の足助城が完成。

山城の基本構造 例 足助城

- ①堀切 尾根筋を切断するように掘られた堀。足助城の堀の底は通路としても使用された。
- ②南の丸腰曲輪 腰曲輪は山の中腹の曲輪。足助城の南の丸腰曲輪は西南の谷間を監視する役目があった。
- ③井戸 籠城戦に備え、水の確保は重要。足助城には山の斜面からの湧水を溜める井戸があった。
- ④西の丸 足助の町や、岡崎・名古屋へ続く街道を望める位置。2棟以上の建物があったと判明。
- ⑤南の丸 足助城の南の丸は角ばった扇形に造られている。台所の役割をもつ曲輪だった。
- ⑥西物見台 遠くを見渡すために築かれた櫓（矢倉）。足助城の西物見台は大きな岩盤の上にある。
- ⑦北腰曲輪 足助城北腰曲輪からは信州に続く街道を正面に望める。調査で建物跡が発見された。
- ⑧南物見台 櫓から南方に鶏足城（足助城の支城）を望め、物見や連絡の役割があったと考えられる。
- ⑨本丸腰曲輪 足助城で唯一礎石を使った建物跡が見つかった曲輪。西の丸と南の丸を結ぶ通路にある。
- ⑩本丸 主郭、中心曲輪とも呼ばれる。信州・美濃への街道、岡崎・名古屋への街道を望めた。

山城として全国初！ 発掘調査を元に 復元された足助城

山城めぐりのポイント

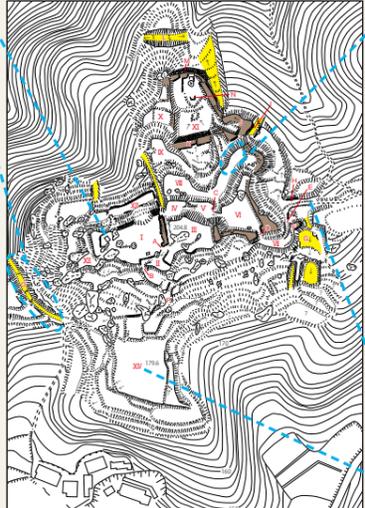
登山・下山時間に注意

初心者は天候と時間に注意を。足場が安定しない雨天時は避け、日暮れまでには麓に戻れるように計画しよう。事前に比高・麓から山頂までの高低差や登山ルートをチェックし、登山装備で臨むのが吉。
縄張図をチェック
縄張図とは、現存する遺構から曲輪などの配置を読み取り、城の構造を示した図。訪問前の予習に役立つほか、現地で見比べながら歩くとおもしろい。多くの縄張図に見られるケバ式図法は、歩きながら距離を体感的に図る歩測によって作図され、現代でも用いられている。

斜面
斜面はケバと呼ばれる実線で描かれる。斜面が長いとケバは長くなり、短いところではケバも短くなる。



虎口
館跡



大給城跡縄張図(原図 高田徹作成)

山城・歴史おすすりモデルコース
豊田市内の山城数か所をハシゴするモデルコースをチェック。(▼P.20)



撮影 金井詞

監修・文/小和田哲男

1944年静岡市生まれ。1972年早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学。1985年文学博士(早稲田大学)。現在、静岡大学名誉教授(公財)日本城郭協会理事長、岐阜関ヶ原古戦場記念館館長。NHK大河ドラマでは、1996年の「秀吉」から2023年の「どうする家康」まで8作品で時代考証を務める。YouTube「戦国・小和田チャンネル」も配信中。



江戸時代に築かれた桜城(→P.13)

平城

平地に築かれた城郭。近世になってさかんに造られ、防衛のため石垣や塀が設けられた。



武田VS徳川の舞台・武節城(→P.12)

平山城

小高い丘を使い、丘城または丘陵城郭とも呼ばれる。山城と平城の中間的な位置付け。



豊田市の山城の代表格・大給城(→P.9)

山城

山の地形を利用し、山上に築かれた城。少ない兵力でも工夫によって高い防衛力を誇った。

山城とはどんな城か 定義と歴史

江戸時代の軍学者が、城を山城・平山城・平城の三つに分類し、それが現代も踏襲されている。山城はその字の示す通り、山の地形を利用し、山の上に築かれた城である。平山城は山城と平城の中間に位置する城で、小高い丘を使ったもので、丘陵城郭あるいは丘陵城郭などともいわれている。平城は平地に築かれた城である。

ただし、江戸時代の軍学者の定義では、山城と平山城のちがいがやや曖昧で、どこまでが平山城で、どこからが山城なのかの線引きがはっきりしていない。「山の上に築かれた城」という言い方をした場合、どの程度の山をいっているのが問題となる。

その場合、注意が必要なのは、山の高さといっても、標高ではないという点である。標高だけでいえば、たとえば長野県の城などは全部山城になってしまう。山の高低をはかるものさしは、麓から城のあるところまでの高さ、すなわち比高である。

では、比高が何mあったら山城といえるのか。

そこが問題で、研究者によって見解が分かれているのが現状である。人によつては、比高50m以上を山城とよんでいるし、人によつては70mという人もいる。私はもう少しハードルをあげて100m以上と考えている。

山城の歴史は古く、古代の高地性集落や朝鮮式山城も山城の範疇に入れる考え方もあるが、一般的には南北朝時代、南朝の楠木正成による千早城・赤坂城などの出現を嚆矢とする。そして、戦いが連続する戦国時代にさらに山城づくりが進化することになる。

合戦は野戦もあるが、城を舞台とした戦いが多い。攻める側からすれば攻城戦、守る側からすれば籠城戦ということになる。そのため、いかに城を守るかということ、山城には様々な工夫がみられるわけである。

そして、もう一つ重要なのは、山城がその武将の本拠の城として位置づけられていた点である。土豪あるいは地侍とよばれるレベルの領主でなく、国人領主レベル、すなわち国衆といった上層の武士の場合、山城の大きさおよび堅固さが領主としてのステータスにもなっていたのである。大きな山城を築くことによって他を圧倒するという考え方で、「あんな大きな城を築く奴にはかなわない」と、戦わずに相手をひた伏せせるといふねらいと効果もあったのである。

戦国期山城の代表格 豊田市の山城の見どころ

豊田市は山城の宝庫である。ただ数が多いというだけでなく、「これぞ山城」といえる戦国期山城を代表するような城がいくつもある。ここでは二つのグループに分けて見どころとなる点と歴史について解説を加えておきたい。一つめのグループは、松平・徳川氏ゆかりの城である。周知のように、豊田市松平町は松平氏苗字の地である。徳川家康以降に作られた系図では、松平氏は清和源氏の末流ということになっている。すなわち、新田義重の末子義季が上野国新田郡世良田莊徳川郷（現在、群馬県太田市尾島町）に住み、徳川氏（得川氏）を称したとし、この義季を始祖として、頼氏―教氏―家時―満義

―政義―親季―有親と続き、親氏に至ったとする。その親氏が徳阿弥という時宗の僧となって諸国をめぐるうち、三河国松平郷の土豪松平太郎左衛門信重の娘婿となり、これが松平氏初代に数えられている。

初代親氏・二代泰親のころは明確ではないが、三代の信光の時代から少しずつはつきりしてくる。おそらく、親氏・泰親時代は松平郷で力を蓄えている段階だったのであろう。その親氏の城といわれているのが豊田市松平町字三斗時さんとうときの松平城である。別名郷敷城ともいう。比高が65mなので、山城といえるか微妙なところである。虎口、横堀、堅堀がよく残っているが、親氏段階のものとは思えない。

この松平城の近くにあるのが大給城である。豊田市大内町字城下で、

比高が130mあるので典型的な山城といつてよい。この大給城は、「三河国二葉松」によると、長坂新左衛門という者が築城した城を、当時、岩津城主だった松平信光が攻略し、孫の乗元に与えたという。この乗元が大給松平氏の祖となる。大給城も虎口や堀切がよく残り、櫓台もみられるが、どこまでが大給松平氏段階に造成されたものなのか、判断がむずかしい城ではある。

二つめのグループが武田信玄・勝頼の三河侵攻にともなう城である。豊田市を含む西三河の地は、今川・徳川の戦いだけでなく、武田・徳川の戦いの舞台ともなっており、山城をめぐる攻防がくりかえされている。中でも有名なのが豊田市足助町須沢の足助城で、別名真弓山城の名でも知られている。この城主鈴木氏（鱧とも書く）は初代忠親からはじまり、重政・重直・信重・康重の五代で、三代重直・四代信重のとき、元龜2年（1571）四月、武田信玄に攻められている。このあと、信玄は伊奈の下条信氏を城代として入れ、天正元年（1573）に武田軍が撤退するまで武田方の城となっていた。比高170mで、山頂の本丸を中心に、四方にのびる尾根を利用して階段状に曲輪が設けられている。

本丸は発掘調査によつて掘立柱建物跡が数棟検出され、高槽・長屋・門などがあつたことが判明し、現在、

そうした成果を受け、二階建ての高槽と平屋の長屋などが推定復元されている。南の丸・西の丸などの曲輪もよく残っていて見どころである。

もう一つ、私の分類に従うと平山城の範疇に入るが、豊田市内における武田信玄・勝頼関係の城として落とすことのできないのが武節城（豊田市武節町城山）である。永正年間（1504～21）に山家三方衆の一家、田峯の菅沼定信の支城として築城され、弘治2年（1556）、武田信玄の家臣下条信氏が攻めたことでも知られている。さらに元龜2年（1571）、信玄が三河侵攻をはかり、田峯の菅沼定直、作手の奥平貞能、長篠の菅沼正貞を降したことがあつたが、このとき、武節城も田峯とともに武田氏に降っている。

天正3年（1575）の長篠・設楽原の戦いで敗れた武田勝頼はこまめで逃れてきて、はじめ田峯城に入ろうとしたが、城を預かる叔父にあたる今泉道善に拒まれて入ることができず、仕方なく武節城に入り、そのまま甲斐へもどっていったという。その年七月、信長の命を受けた佐久間信盛および家康家臣の酒井忠次らによつて攻め落とされ、再び徳川の城となっている。

体感できる歴史の現場 山城歩きの魅力

築城のプロセスは大きく次の四つ

だけでなく、曲輪配置、さらには堀の形、横堀か堅堀かなども観察しながら歩くことを勧めている。

そしてもう一つ、山城歩きの魅力として私がよくいうのは、歴史の現場を実際に歩くことができるという点である。四〇〇年前、五〇〇年前のものといえば、古文書や甲冑・刀剣などにしても、博物館でガラスケース越しにしか見ることができない。もちろん、触ることなどできない。しかし、城跡はどうだろう。虎口や曲輪を歩くことができるのである。土塁に登ったり、堀に降りたりするときは、遺構を壊さないようにしなければならぬが、「ここを武田信玄が通ったかもしれない」「この景色を徳川家康も見ただかもしれない」と感じることはできるのは山城歩きの魅力でもあり、楽しみである。山城を歩くことで体力維持という健康面のメリットもあるし、歴史を知って歩くことで知的好奇心も満足できるという点で一石二鳥ではないかと考えている。その城の歴史および関係する武将のことなどをあらかじめ本で読んでおくと、楽しみはさらに倍加する。

市場城（→P.11）の石垣。鈴木氏の本城で、安土桃山時代に改修されたときの石垣も残る。

※現在、写真の石垣周辺には安全上の理由により柵が設けられている



戦国武将の攻防を物語る 豊田の山城の姿

家康の源流・松平氏や三河の戦国武将たちの出世・激戦の地！

豊田山城

14選

豊田市内の山城のうち、足を運べるスポットを厳選して紹介。また、地域の歴史を語るうえで外せない平山城・平城もあわせて、4テーマ全14城を取り上げる。

所在地アクセスなどはツーリズムとよたのHPで確認しよう



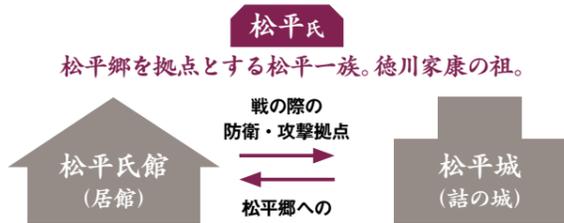
テーマ1 松平一族の城

徳川の原点がここにある！

豊田市内には松平一族にとって重要な山城・平山城が存在する。のちの天下人・徳川家康に繋がる松平一族の足跡を、3つの城の姿から追う。

【松平一族が城をどう使ったか？】

〈本城・詰の城・出城の関係〉

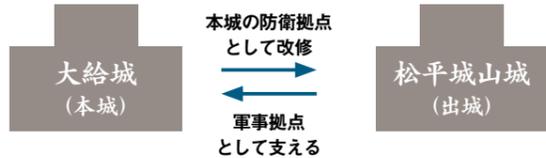


詰の城とは戦時に籠もる機能を備えた防衛拠点。当初、松平氏は松平郷の松平氏館を居館、平山城である松平城を詰の城として利用したか。

大給松平氏

松平信光の孫・乗元を祖とする一族。

※のちに松平郷の松平氏も大給松平氏に從属。



大給城は大給松平氏が本城とした堅固な山城。武田信玄・勝頼親子の三河侵入に備えて改修された。松平城山城はそれをサポートする出城だったか。



監修・文／小和田泰経
1972年、東京都生まれ。歴史研究家。現在、静岡英和学院大学講師。大河ドラマ「どうする家康」では資料提供を担当。主な著書「監修書」に「徳川家康と最強家臣団」(ポピージャパン)、「ボケット城図鑑」(オーム社)、「図解日本の城・城合戦」(西東社)、「天空の城を行く」(平凡社新書) など多数ある。

始まりの城・松平城と大給城、松平城山城

室町時代に松平郷を本拠としていた松平氏の居館が松平氏館で、その松平氏館の南500mほどに位置しているのが松平城である。西に延びる尾根の先端に築かれており、麓からの高さは50mほどなので、平山城といつてよい。主郭から西側に向けて三つの曲輪が連なっている。

一般的に、この松平城は、松平氏館の詰の城として初代松平親氏によって築かれたとされる。ただし、松平城から松平氏館を望むことはできず、曲輪の周囲に土塁も設けられていない。規模も小さく、実際のところ、松平氏館の詰の城として築かれたかどうかは不明である。

城の西端には物見のための櫓台がおかれていたとみられ、現在の国道301号を眼下におさめることができる。築城当初は、松平郷に侵入する敵を監視あるいは迎撃することを目的としていたのではないか。

なお、西側を除く三方の山腹には横堀がめぐらされており、これはのちに改修されたものらしい。松平郷の松平氏では、3代目の信光が西三河の平野部へと進出し、その子孫が「十八松平」として割拠していった。そうしたなか、信光の孫乗元を祖とする一族が、大給城を本城として発展し、大給松平氏とよばれる。天正

大給松平氏の本城

1 大給城

おぎゆうじょう



〔種類〕山城
〔築城年〕15世紀末
〔廃城年〕天正18年(1590)
〔城主〕松平乗元など

大手
絵図には大手とあり、城の出入口と考えられる。
館跡
絵図上では「ハジヤウ曲輪」の記載がある。

水の手
水の手があった場所か。現地では中央部に深さ約80cmの石組による井戸も確認。

松平氏館の詰の城か

2 松平城

まつだいらじょう



〔別名〕郷式城
〔種類〕平山城
〔築城年〕不明
〔城主〕松平親氏など

標高約303mの城山に位置した松平城。山腹には400mの空堀の跡が残っている。



松平城は松平氏館の南約500mに位置する。ルートが整備され初心者にもおすすめ。

大給城の出城か

3 松平城山城

まつだいらじょうやまじょう

〔別名〕大田城
〔種類〕平山城
〔築城年〕不明
〔城主〕松平信光が修理と伝承あり
※看板・散策路が整備されていないため見学時は装備や時間配分に注意を。

江戸時代に作成された絵図。現在と違う点もあるが、「篠竹多茂り曲輪見エス」とあり、廃城後の様子を伝える。

〔諸国古城之図 三河加茂 大給〕広島市立中央図書館(浅野文庫)蔵



大給城内の松平乗元の墓所。江戸時代の文政・天保年間(1818~45)に造られた。

城内で水を得るための施設・水の手。東西約30m、南北45mの規模で、北と南に石垣がある。



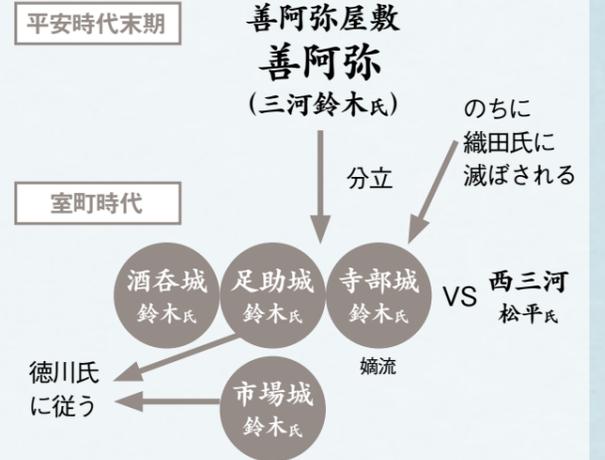
この大給城の1.5kmほど東北方向に位置しているのが松平城山城である。麓からの高さが70mほどの平山城で、東西に長い主郭の東北方向と西北方向にのびるそれぞれの尾根に曲輪を配置しているため、全体的には馬蹄形となっている。
松平城山城の築城経緯については不明である。ただ、大給城と同じく虎口に石積を設けるなどしており、大給城の出城として、大給松平氏により改修されたものであろう。

鈴木一族の城

在地領主のしぶとさ!

三河国加茂郡矢並郷をルーツとする一族で、室町時代には分立。各城を拠点にして時代を生き抜き、松平氏、徳川家康、織田信長などと渡り合った。

【三河の一族・鈴木氏とは?】



【山城の防御構造】

虎口 城の弱点になり得る出入口に、防御機能を設けたもの。土塁を切って門を造る平虎口や、土塁をずらして門の前で道を折り曲げる喰違虎口など。

櫓 (矢倉)

古くは矢を入れておく倉(矢倉)で、次第に櫓型になった。遠くの敵を見張ったり、防御戦の際に弓矢や鉄砲で射撃したりした。



復元された足助城の南物見台。

堀 山城の堀は水のない空堀が基本。山城によって形状が異なる。

横堀 多くの山城に見られる形状で、曲輪を取り巻くように掘られた。斜面を遮断する役目も。

縦堀 斜面の縦方向に掘った堀。これを何本も造ると畝状縦堀となり、敵が横に広がりにくい。一列になった敵を迎撃できる。

堀切 ひと続きの尾根上を断ち切った堀。曲輪と曲輪の間に設けられ、普段は橋を架けていた。



市場城の畝状縦堀。縦堀を連続して並べ、防御を固めた。

寺部城

寺部鈴木氏の本城

てらべじょう

【種類】平城 【築城年】15世紀
【廃城年】天正18年(1590)
【城主】寺部鈴木氏など



城の面積は約1万㎡で、城内に井戸が3か所あった。鈴木氏時代の遺構は西側の土塁のみ。

足助城

足助鈴木氏の本城

あすけじょう

【別名】真弓山城 【種類】山城
【築城年】15世紀後半
【廃城年】天正18年(1590)
【城主】足助鈴木氏



本丸の高櫓からは足助の町並みを見下ろせる。高櫓は江戸時代の天守に該当する。

飯盛山城

鎌倉時代からの足助氏の本城

いもりやまじょう

【別名】飯盛城 【種類】山城
【築城年】鎌倉時代
【廃城年】天正18年(1590)
【城主】足助氏など



鎌倉時代に足助氏が城を築いた飯盛山。一帯は風光明媚な地として知られる。

市場城

小原鈴木氏の本城

いちばじょう

【種類】平山城 【築城年】文亀2年(1502)
【廃城年】文禄元年(1592) 【城主】小原鈴木氏



堀 曲輪を囲むように設けられた堀がしっかり描かれている。北西部分には畝状空堀群もあった。

江戸時代の市場城を描いた絵図には、総石垣化された曲輪や櫓形門の跡などが見られる。

【諸国古城之図 三河加茂 市場】
広島市立中央図書館(浅野文庫)蔵

石垣 絵図が描かれた当時、曲輪の周囲は総石垣造であったことがわかる。

小渡城

市場城の出城か

おどじょう

【種類】平山城 【築城年】16世紀
【廃城年】不明 【城主】小原鈴木氏



増福寺(風鈴寺)の裏手から弘法山を上り、主郭を経て約30分で周遊可能。

さて、足助城から谷を挟んだ隣の飯盛山には、飯盛山城が築かれていた。麓からの高さが130mもある山城で、在地領主である足助氏が没落したことにより、鈴木氏の支城となつたらしい。城下を流れる巴川は紅葉の名所香嵐渓として知られており、香積寺は居館の跡とされる。

足助城から10kmほど北に位置しているのが市場城である。麓からの高さが60mほどの丘陵南端に築かれた平山城で、畝状縦堀で防御を固めていた。城主は、足助鈴木氏の流れをくむ小原鈴木氏で、鱈氏とも書く。

この市場城から6kmほど東方の矢作川東岸に築かれている小渡城は、麓からの高さが70mほどの平山城である。市場城と同じ畝状縦堀で防御を固めていることを考えると、市場城の小原鈴木氏によって改修されたのではないだろうか。

戦国時代の終わりには、西側から織田信長、東側から今川義元が三河に進出を図るようになった。桶狭間の戦い後、今川氏から自立した徳川家康の領国に組み込まれるが、豊田市の中心部は織田信長の領国となつている。このため、寺部城の鈴木氏は織田氏に滅ぼされ、足助城や市場城の鈴木氏は徳川氏に従つた。なかでも、市場城主鈴木重愛は家康に重用され、居城を石垣や櫓形を擁する近世城郭として改修している。

武田氏との攻防

豊田が戦国激戦の最前線！

戦国時代の三河（豊田）、遠江、駿河、甲斐は、徳川、今川、織田、武田が激戦を繰り広げた地。三河の山城はその激しい攻防戦の舞台になった。

【武田vs徳川 山城攻防戦の流れ】

和暦(西暦)	合戦名	三河をめぐるできごと
永祿3年(1560)	✕ 桶狭間の戦い	今川義元討死。武田信玄と、今川から自立した徳川家康が対立！
元亀2年(1571)	✕ 西上作戦	信玄が三河への侵入を計画。足助城が武田氏に攻略される。
元亀3年(1572)		武節城の菅沼定忠が武田氏に降伏。
元亀4年(1573)4月	✕ 三方ヶ原の戦い	家康が三方ヶ原で信玄に敗れ、浜松城へ。信玄没。勝頼が家督相続。
天正3年(1575)4月		家康の長男・信康が足助城を奪還！以後、旧主鈴木氏が守備。
同5月	✕ 設楽原の戦い	勝頼が三河侵入。足助城を攻撃。川口城、大桑城、大沼城などが陥落。
天正18年(1590)		家康関東移封。徳川勢力下の複数の城が廃城へ。

※武田氏による侵入の年次については異説も存在する。

10 長篠城主菅沼氏との境目の城 大桑城



幅2mほどの土橋が続く。ほか、主郭の虎口、空堀、土塁が見どころ。

今川・武田との激戦を物語る 徳川勢力下の山城

戦国時代の初め、豊田市を含む三河は、駿河今川氏の支配下にあり、永正年間(1504~1521)には、田峯城(北設楽郡設楽町)の菅沼氏が武節城を築いている。武節城は麓からの高さが40mほどの平山城で、東方約2kmに山城としての夏焼城を置いて出城としたらしい。

11 足助城の前衛 大沼城



幅2mほどの土橋が続く。ほか、主郭の虎口、空堀、土塁が見どころ。

永祿3年(1560)の桶狭間の戦いで今川義元が討ち死にしたことにより今川氏の勢威は急速に衰退する。こうしたなか、甲斐の武田信玄が三河への侵入を図り、今川氏から自立した徳川家康と対立していく。武節城も武田氏に攻略された。

12 美濃方面をおさえる 徳川方の城 川口城



城ヶ峰の山上(比高40m)。本丸跡は南北約30m、東西約10mの規模。

武田信玄の跡を継いだ子の勝頼は、天正3年(1575)3月、東濃から巴川流域を南下し、4月には足助城を攻撃する。このとき、川口城、大桑城、大沼城など多くの城が陥落したらしい。詳しい戦いの経過は不明だが、徳川氏が追い詰められていたのは確かであろうである。

9 長篠の戦いにおける 武田氏の拠点 武節城



本丸跡の石碑と武節城陣没者供養碑。かつて武田と徳川の激しい攻防戦の舞台になった。

13 武節城の出城か 夏焼城

「種類」山城 「築城年」南北朝時代 「廃城年」不明 「城主」山田氏 「城主」川口源左衛門など

14-2 金谷城に代わる「拳母城」 桜城



桜城は隅櫓の石垣が残るのみ。桜城址公園として親しまれている。

豊田市中心部 拳母エリアの3城

現在の豊田市中心部は、かつて拳母(衣)という地名であり、この地に築かれた金谷城、桜城、七州城の3城は、いずれも拳母城とよばれる。鎌倉時代から拳母を支配する中条氏の居城だったのが金谷城である。金谷城は、台地の東端に築かれた平山城だった。室町時代の中条氏は、寺部城の鈴木氏や東広瀬城(豊田市東広瀬町)の三宅氏らを従えていた。しかし、戦国時代に駿河から進出してきた今川氏に押されて没落してしまふ。永祿3年(1560)の桶狭間の戦い後、金谷城は織田信長に攻略され、その支配下におかれた。

衣・拳母3カ城

山城の時代の終わり

豊田市中心部の拳母3カ城は、山城から平城の時代への変遷を物語る。江戸時代の築城である桜城、七州城は、豊田市内の近世城郭の代表格だ。

山城から平城の時代へ

	戦国時代の山城	近世の平城
定義	山の地形を生かし、山の上に築かれた城	平地に築かれた城
比高	100m以上	0~20m
城の素材	主に土・木材	土・木材のほか、石・瓦
天守	なし※櫓が該当	あり
石垣	なし※後世の改修である場合も	あり
目的	合戦や一帯の守備、見張り	政治・居住の拠点
防衛	自然の地形を巧みに利用	人工的な堀や石垣を構築

	戦国時代の山城	近世の平城
豊田市内の主な城	大給城、足助城など	桜城
全国の主な城	岩村城、備中松山城など	広島城、松本城など

鎌倉時代からの 名族中条氏の本城 金谷城

かなやじょう

「別名」衣城 「種類」平山城 「築城年」延慶年間(1308~1310) 「廃城年」慶長9年(1604) 「城主」中条氏

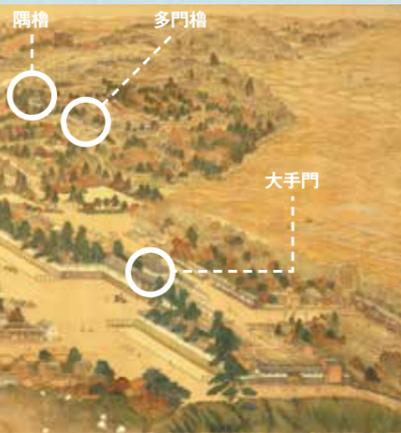


金谷町の勝手神社内にある石碑。当時の城はやや東に位置し、名鉄三河線橋台付近や高木稲荷で遺構を確認できる。

七州城 桜城に代わる最後の「拳母城」

しちしゅうじょう

「別名」拳母城 「種類」平山城 「築城年」天明2年(1782) 「廃城年」明治5年(1870) 「城主」内藤氏



明治時代、拳母藩士だった牧野敏太郎が幕末に見た記憶をもとに描いた七州城の様子。「七州城図」豊田市博物館蔵

この城は、三河・尾張はもろろん、美濃、信濃、遠江、伊勢、近江など、七州を見渡すことができるということから七州城とよばれ、櫓や石垣を擁する近世城郭として完成した。

【足助の歴史】

和暦・西暦	できごと
11世紀末～14世紀中頃	尾張の山田重長が足助に入り、足助氏を称する。
文正元年(1466)	足助八幡宮本殿再建。
戦国時代	足助鈴木氏が足助城に本拠地を置く。
大永5年(1525)	岡崎の松平清康が足助へ攻め寄せる。鈴木氏が松平の麾下へ。
天文23年(1554)	今川家家臣・馬場幸家が足助へ攻め寄せる。鈴木氏が今川方へ。
永禄7年(1564)	松平元康(家康)が足助へ攻め寄せる。鈴木氏が松平の麾下へ。
元亀2年(1571)	武田信玄が三河攻略。足助城は武田方、下条伊豆守信氏が城代になる。
元亀4年・天正元年(1573)	家康長男・岡崎三郎信康が足助城攻略。武田勢を追い払い、旧主鈴木氏に守らせる。
天正18年(1590)	鈴木氏が徳川家康に従い関東へ。足助城廃城。
天和元年(1681)	本多氏が五千石で足助に陣屋を構える。
近世	伊那街道の重要な中継拠点として栄える。
元禄年間(1688～1704)	宿場に加え、商業の中心地として発展する。
安永4年(1775)	大火で町並みのほとんどが焼失。
文化文政期～明治期	多くの町家が建てられ、建造物群が成立。
明治11年(1878)	東加茂郡役所設置。三河地域の行政の中心のひとつに。
明治44年(1911)	国鉄中央線全線開通。物資輸送基地の機能が衰退。
大正～昭和時代	巴川両岸に数千本のもみじを植樹し香嵐溪と命名。
平成17年(2005)	旧足助町が豊田市と合併。豊田市足助地区へ。

え 馬頭観音

新町の入口には馬頭観音、不動明王、役行者などの石仏が祀られ、街道の景観を今に伝える。足助の俳人板倉塞馬が建立した芭蕉の句碑も。

📍 豊田市足助町落合 📍 見学自由
🚌 バス停香嵐溪一の谷口から徒歩5分

お 足助八幡宮

天武天皇白鳳2年(673)創建、古くから足、交通、旅の守護神として信仰されている。毎年3月の足祭り(足健康祭)には大ぞり神輿、10月の足助祭りには警衛隊と豪華な山車が出る。

📍 豊田市足助町宮ノ後12
📍 拝観自由(社務所10:00～16:00)
📍 拝観無料 🚌 バス停香嵐溪から徒歩すぐ



い 旧鈴木家住宅

足助を代表する大商家で、紙、漆、醸造業や金融業、土地経営などで財を成した。約4000㎡の敷地に16棟の建物が並び、一部を見学可能。

📍 豊田市足助町本町20
📍 金・土・日曜、祝日の10:00～16:00
📍 月～木曜 🚌 バス停足助学校下から徒歩3分



かつての屋号は「紙屋」。令和5年から住宅の一部の主屋の公開を開始。



国の重要文化財。主屋の奥で保存修理工事が進行中。

室町時代の建築様式を伝える檜皮葺三間社流造の本殿は国の重要文化財。



足に関する霊験譚が残る神社。現在はスポーツ選手も参拝する。

足助の町並みMAP



街道とは

街や集落・神社仏閣などを陸上で結ぶ主要な交通路。人々の移動や物資の運搬、情報の伝達に不可欠なもので、各時代の統治者により国の支配や発展のために整備が進められた。



あ 足助の町並み

江戸時代初期には現在の町割りができなかった。約2kmにわたって町並みが続く。

伊那街道(中馬街道)の中継地で、物資運搬や庶民の通行の要所として栄えた町。レトロな一角は国の重要伝統的建造物群保存地区。

📍 豊田市足助町西町・新町・本町・田町
📍 見学自由 🚌 バス停香嵐溪から徒歩すぐ

足助城主が見守った街道！
山海の物資が行き交った要衝を歩く

足助街道 歴史旅

三州(三河)と信州を結ぶ重要なルートだった伊那街道(三州街道)。その一部、岡崎～足助の足助街道は、**経済・交通はもちろん、足助城の防衛面でも重視された要衝だった。**

監修・文/藤井勝彦

い 足助城 (P.11)

足助一帯を見下ろせる真弓山(標高301m)にあり、かつて足助鈴木氏が拠点とした。



本丸から足助の町並みや街道を望める。

伊那街道(三州街道)と足助街道



稲武とは

戦国時代に武節郷と呼ばれた稲武。伊那街道と美濃街道の分岐点にあり、塩をはじめとした物資の運搬で賑わった。江戸時代は宿場町として栄え、今も塩問屋・大和屋の建物などが残る。

塩の道・足助街道と足助の町並み

足助街道とは、岡崎から三河の要衝・足助へと向かう交通路である。矢作川の支流・巴川に沿うように設けられた街道で、古くから海と山を結ぶ交通路として発展してきたところであった。江戸時代には、三河湾で生産された塩を信州方面へと運ぶ「塩の道」として賑わったところでもある。

三河湾から運ばれたのは塩の他、昆布や海産物など。一方、信州からは生糸や木綿、煙草などが運ばれた。今も白壁土蔵造りの町家が軒を連ねていることからわかるように、繁栄が際立つところであった。

沿道には、足助氏の居城となった足助城や飯盛山城などのほか、国指定重要文化財の紙屋鈴木家を中心とする重要伝統的建造物群保存地区や、もみじの名所・香嵐溪がある。さらには、源義経の家臣・鈴木重善が創建したとも伝わる拳母神社や松平家の館跡に建てられた松平東照宮、元亀2年(1571)に武田信玄が三河に侵入して以来元亀4年(1573)まで領有していたという金山開発の拠点・金蔵連集落なども近い。

足助の町の繁栄ぶりを垣間見ながら、当地で練り広げられた歴史物語に目を向けておくのが良さそうだ。

足助氏の系図に登場する 錚々たる歴史人物たちとは？

三河国加茂郡足助庄(豊田市足助町)を拠点としていたのが足助氏である。元を正せば、清和源氏の流れを汲む名門一族で、尾張源氏の祖とみられる源(浦野)重遠の孫・重長が当地に住んで足助氏を名乗ったのが始まりだといふ。

興味深いのが、その系図。錚々たる歴史的人物が数多く登場してくるから驚かされてしまうのだ。

まず、重長の祖父・重遠が、天下第一の武勇を誇った八幡太郎こと源義家の娘を娶っている。源氏の棟梁として、信望を集めた御仁であった。

また、重長自身も、義家に劣らぬ史上最強ともいふべき猛将の娘を娶っているから凄い。それが、弓を持ったせれば天下と謳われた源為朝であった。身長は7尺(2m10cm)という巨漢で、弓を支える左腕が弦を引く右腕よりも4寸(約12cm)も長かったとか。まさに弓を引くために生まれてきたような武人であった。保元の乱で崇徳上皇側に与したことで伊豆大島へと流されたものの、武力にものを言わせて、かの地に君臨。その娘が生んだのが辻殿で、嫁いだのが、源頼朝の嫡男・頼家であった。二人の間に生まれたのが、源実朝の暗殺者・公暁だったというから、ただただ驚く他ないのだ。

『歴史人』執筆陣が語る豊田の“豊かさ”

古くから多彩な文化が育まれ、
産業都市としても発展してきた豊田。
月刊『歴史人』本誌執筆陣である専門家の視点で、
“豊かさ”について語ってもらった。

「のだみそ」「いなぶ桶茶」に 「産地食」の恵みあり

豊田市では地元で生産・収穫された農産物を「産地食消」ではなく「産地食」と言い換えて使う。食の安全や拡大を目指した強調表現である。文化庁が地域に根付いた伝統的な食文化の継承などを認定する「100年フード」に稲武地区の「いなぶ桶茶」が「食文化ミュージアム」に樹塚西町の「のだみそ」味噌蔵・蔵の杜が選定されている。

「いなぶ桶茶」は、江戸時代から稲武地区で広まったとされる庶民文化。桶の中に煮出した番茶と塩を入れ、茶筌で泡立てて飲む「お茶」。

「のだみそ」は、味噌蔵の一種。八丁味噌。大豆だけの味噌に麹菌を直接つける製法を定着させた。特徴の「天然醸造」は、加温や温度調節はせず自然の気温変化で発酵・熟成を行う。これにより様々な酵素が反応して風味・旨味に富んだ味噌になる。

そこで、旧海軍飛行場の格納庫跡や地域の小中学校校舎を再利用して使っている味噌蔵が力を発揮する。最も古い味噌蔵は、江戸時代から150年以上も使っている。

味噌蔵や木桶・味噌樽などが文化庁の「食文化ミュージアム」認定になったことを受け、蔵元はミュージアム宣言をし、味噌造りワークショップなどを続けていくという。

「挙母」から豊田へ 継がれたモノづくり文化

昭和34年(1959)、挙母市は豊田市に改称し、モノづくりの街から世界企業を育む街へ新たな一歩を踏み出した。歩みの始まりは古地名「挙母」の「古事記」登場、当地の赤引米(最上の精米)朝廷・伊勢神宮献上との「日本書紀」の記述にさかのぼる。挙母は衣に通じ、養蚕と製糸の技で知られた歴史を物語る。応仁の乱で献上は途絶えたが、明治期に古橋暉児が再興。大正・昭和・平成・令和の天皇即位の大嘗祭さらに伊勢神宮の神御衣祭での献上が復活、継承されて市の誇りとなった。

モノづくりの伝統は、以降の時代もクルマの街・豊田に息づく。パトロンをつないだのが豊田佐吉であり、改良を重ねて完成した無停止昇降式豊田自動織機は世界市場を席巻した。昭和8年(1933)には刈谷のトヨタ自動車織機製作所に自動車部が誕生。これがトヨタ自動車の起源である。現在、同社の本社は豊田市にあり、その精神にトヨタ会館で触れることができる。

養蚕・製糸から自動織機、自動車へ、技を究めるモノづくり文化は時代とともにかたちを変えながら息づく。豊田市内に残る縄文・弥生の遺跡、古墳製造に携わった古代氏族ゆかりの野見神社など数々の史跡もまたモノづくりの歴史の証しといえる。



※2026年夏に新コーナーをオープン予定。リニューアルに伴い、2026年6月末まで2F展示を閉鎖中。

トヨタ会館
豊田市に本社を置くトヨタ自動車の企業展示館。最新の電動化技術や安全技術、モビリティ、社会貢献活動などを紹介する。
豊田市トヨタ町1 9:30～17:00
日曜 入館無料
バス停トヨタ本社前から徒歩5分

産業・食 モノづくり 豊食



江宮 隆之

歴史小説家・時代小説家・ノンフィクション作家。山梨日日新聞社編制局長・論説委員長などを経て歴史作家として活躍。1989年『経清記』(新人物往來社)、1995年『白磁の人』(河出書房新社)など著書多数。

文化庁令和5年度100年フードに選定 いなぶ桶茶

江戸時代～大正時代に稲武地区で広まった文化。番茶を桶に入れ、茶筌に塩をつけて点てる。文化庁「100年フード」に認定。



文化庁令和4年度100年フードに選定 五平餅

豊田市産の豆味噌や米、ほせ(木の間伐材で作る五平餅の棒)を使う地元のソウルフード。中部地方の山間部発祥で、山の仕事を生業とする人々が、山仕事の安全を祈る祭り「山の講」前夜に食べていたという。詳細はツーリズムとよたのHPでチェック。



豆味噌

樹塚味噌

(のだみそ株式会社)
昭和初期の創業以来、天然醸造の味噌を守り続ける。
豊田市樹塚西町南山6
9:00～17:00
日曜、祝日 愛環線北樹塚駅から徒歩5分



矢作川・矢作ダム

矢作ダムは矢作川上流約80km地点、愛知県と岐阜県の県境に位置するアーチ式コンクリートダム。事前予約制で見学が可能。
※見学情報は矢作ダム公式HPで要確認。



香嵐溪

矢作川支流・巴川沿いの景勝地。香積寺11世の三栄和尚が寛永11年(1634)にモミジを植樹したことに始まる紅葉も見事。

豊田市足助町飯盛 見学自由
バス停香嵐溪から徒歩すぐ

**自然と人の営みはひとつ
矢作川・香嵐溪の恵み**
豊田市の歴史は矢作川とともにある。街の中心をつらぬく流れる古くから農地を潤し、物流の動脈で、近代には水車を動力に紡績業が産声をあげ、現代のクルマの街につながる産業の発展をもたらした。
川はいくつもの支流に分かれて街を四季の水辺で彩り、その姿を人々は愛でてきた。なかでも名高い名所といえば香嵐溪である。清流に映える3千本の紅葉が、まず見事。江戸時代に香積寺の三栄和尚が楓を植えたのが始まりで、後の人々も植え継いで今の絶景が生まれた。待月橋の赤いシルエットと紅葉の競演も美しい。さらには三栄和尚手植えの古木が残る香積寺の参道、紅葉が五色のグラデーションで色づく飯盛山など、一帯は自然の芸術と呼ばれる風光明媚に満ちあふれ、見飽きない。

香嵐溪へはかつての宿場町、足助が起点になる。重要伝統的建造物群保存地区に指定された古い街並みが郷愁を誘う。
流域はアユをはじめニホンカワトンボ、ニホンイシガメ、オシドリなど希少種を含む多様な生きものたちの生息地でもある。矢作川の水の恵み、花木のうつろい、人の営み、さまざまな命の息吹がひとつに交わる風景が街のゆたかさを物語る。

水・自然 から 歴史・文化



藤井 勝彦

歴史紀行・作家・写真家。日本各地の神話の第一人者。『日本神話の迷宮』『日本神話の謎を歩く』(天夢人)『写真で見る三國志』(JTBパブリッシング)など、日本および中国の古代史関連等の著書で知られる。



豊田市小坂本町 8-5-1
10:00～17:30
(入場は17:00まで)
月曜(祝日の場合は開館)、展示替え期間
名鉄豊田駅から徒歩15分

豊田市美術館

かつて七州城があった場所に立つ美術館。近現代の国内外の作家の作品を収蔵し、豊田の文化の豊かさを今に伝える。

猿投神社

大碓命を祀る古社。猿投山で毒ヘビのために亡くなったと伝わる祭神を慕い、左鎌を奉納して祈願する風習がある。

豊田市猿投町大城5
拝観自由 バス停猿投神社前から徒歩すぐ



豊田市博物館

豊田市の歴史・人々の暮らしについて学べる総合博物館。「長篠・長久手合戦図屏風」や重要文化財「織田信長像」なども収蔵。

豊田市小坂本町 5-80
10:00～17:30
(入場は17:00まで)
月曜(祝日の場合は開館)、展示替え期間
名鉄豊田駅から徒歩15分



猿投神社や織田信長像など 貴重な文化財が残る土地

豊田市といえば、真っ先に思い浮かぶのが、武田信玄と徳川家康の攻防だろう。その舞台となった足助城が興味深い。家康を恐怖のどん底に突き落とした三方ヶ原の戦いはよく知られるところであるが、その前年に信玄が三河へと侵攻して、足助城などを攻め落とすという事実を知ると、信玄が病没したこと、その結果が無に帰してしまっただけからかもしれない。

さらにもう一つ、豊田市を語る上で欠かせないのが、「織田信長像」(富興寺所蔵)である。細面のキリッとした顔立ちの信長像は教科書にも掲載されているから、誰もが一度は見たことがあるはずである。

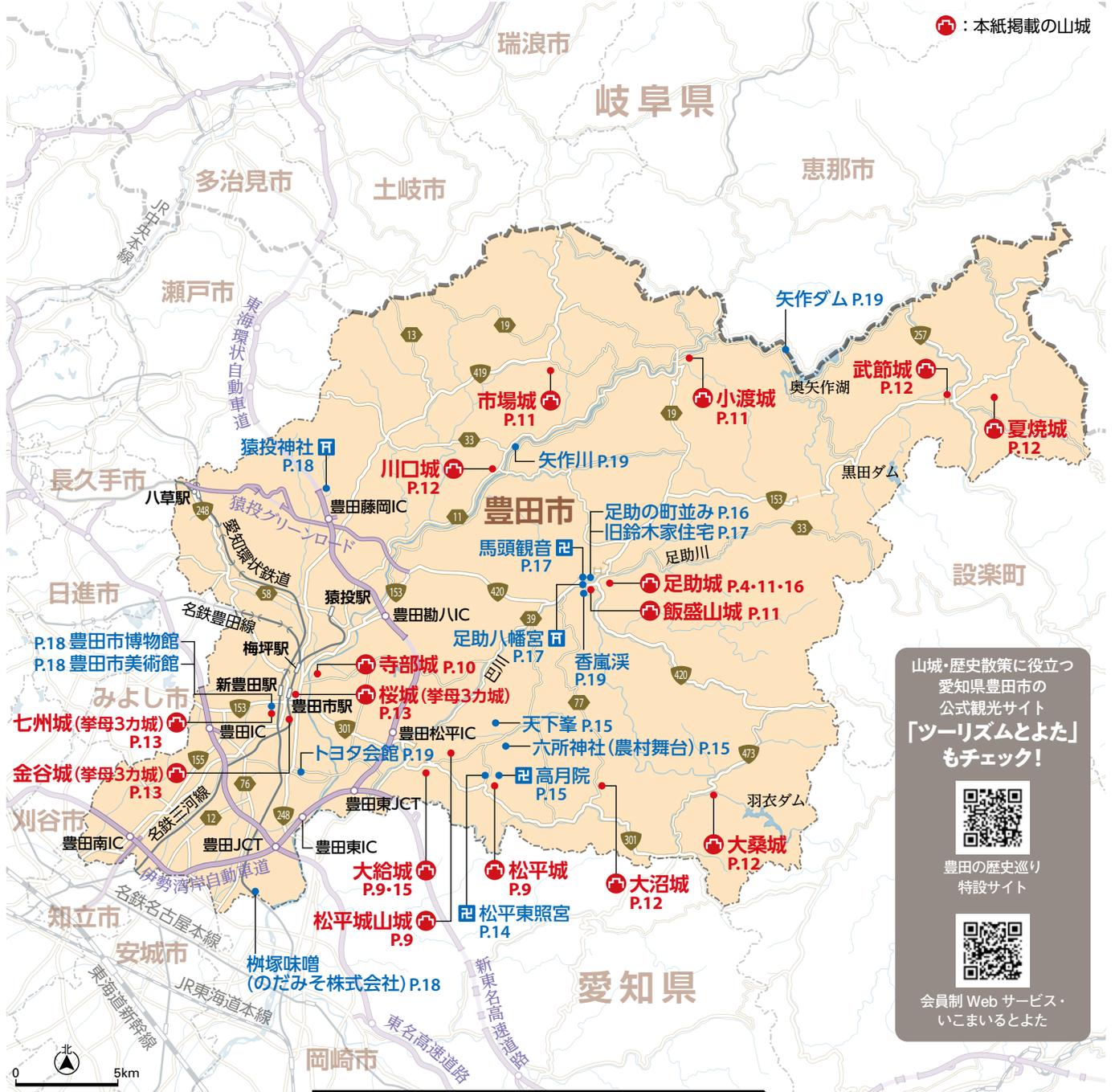
そればかりか、ここは古代史上における最重要人物の一人、大碓命ゆかりの地でもある。小碓命こと倭建という双子の弟に無残な殺され方をしたことが「古事記」に記されている。しかし、大碓命を祀る豊田市猿投町の猿投神社に伝わる話は異なる。ここでは、大碓命が美濃国に封じられた後、当地の開拓に尽力したという。その後、猿投山において毒蛇に噛まれて亡くなったとも。前述のように、中世の信玄や家康、信長ばかりか、古代の大碓命の名まで登場すること、に感無量となってしまうのだ。

本誌掲載の
山城と
スポットはココ

豊田市内山城・歴史MAP

本誌掲載の山城や歴史スポットをチェック。
テーマを立ててプランニングをし、山城見学や歴史散策を楽しもう。

●：本紙掲載の山城



山城・歴史散策に役立つ
愛知県豊田市の
公式観光サイト
「ツーリズムとよた」
もチェック！

豊田の歴史巡り
特設サイト

会員制 Web サービス・
いこまいるとよた

山城・歴史おすすめモデルコース

山城探求コース

豊田市内にある、松平氏の歴史や武田勢との攻防の歴史にふれられる山城を巡るコース。初心者も山城の数を減らし、①②③をじっくり散策するのもおすすめ。

- ①大給城 所要1時間30分
↓車で10分
- ②松平城山城 所要1時間
↓車で10分
- ③松平城 所要1時間
↓車で15分
- ④大沼城 所要40分
↓車で10分
- ⑤大桑城 所要40分

所要約6時間

歴史人編集部選定！
山頂に眠る山城遺構の迫力に圧倒される！大給城の水の手曲輪や石垣は必見です！

松平郷周遊コース

徳川家康のルート・松平郷をはじめ、松平城、大給城など松平氏関連のスポットをじっくり見学するコース。まずは松平郷で一族の歴史にふれ、発展の礎となった2城を巡りたい。

- ①松平東照宮 所要40分
↓徒歩5分
- ②高月院 所要40分
↓徒歩5分
- ③松平郷園地 所要30分
↓徒歩10分
- ④松平城 所要1時間
↓車で10分
- ⑤大給城 所要1時間30分

所要約5時間

歴史人編集部選定！
松平城は、松平東照宮から徒歩圏内の好立地！徳川の源流に息づく趣をぜひ体感して！

足助エリア満喫コース

古くから交通の要衝だった足助街道周辺と、地元の鈴木一族が拠点とした足助城を中心に見学するコース。重要伝統的建造物群保存地区の足助の町並みや、香嵐渓の絶景も見どころ。

- ①足助八幡宮 所要30分
↓徒歩10分
- ②足助の町並み 所要30分
↓徒歩1分
- ③旧鈴木家住宅 所要40分
↓徒歩10分
- ④香嵐渓 所要30分
↓徒歩10分
- ⑤飯盛山城 所要40分
↓車で10分
- ⑥足助城 所要1時間

所要約5時間

歴史人編集部選定！
足助城は復元により整備された歩きやすさが魅力！飯盛山城と一緒にぜひ紅葉の時期に訪れたい！

とよた人

Toyota Jin

Powered by 歴史人

Vol.01

発行人/ 園部 充 編集人/ 後藤隆之
2026年3月25日発行
発行所 ABCアーク 〒105-0004 東京都港区新橋6-22-6 JOYOHIL4階

FREE 無料
ABCアーク